

『チャーリーとチョコレート工場』

—チャーリーが選ばれた理由—

金子 弥生

Charlie and the Chocolate Factory: Why Was Charlie Chosen?

Yayoi Kaneko

Abstract

Willy Wonka, a chocolate maker, places golden tickets in five candy bars. The five children who find the Golden Tickets in the bars they purchase are invited to his chocolate factory. Each of them seems to be an only child. It is commonly believed that an only child can do whatever he or she wants to do because he or she has no siblings with competing desires. Each of the five children except for Charlie Bucket grew up in rather rich families so that they could get almost anything they wanted just by asking their parents. These rich children can, for example, buy as many candy bars as they want until they get the Golden Tickets. Since their parents spoil them, they have become very selfish. Charlie Bucket, however, must repress all his desires because his family is too poor to buy luxury foods such as candy bars. Poverty seems to be an obstacle which will prevent us from doing what we want, but actually it teaches Charlie the importance of doing what he should. Because of poverty, Charlie becomes a good boy who can control his feelings, trust other people and gain the power of observation.

Also, Charlie, who is given a bar of candy as his birthday present, always feels happy when he eats it. Because he cannot eat delicious things whenever he wants, he truly appreciates it when he can. The four rich children but Charlie do not feel happy when they eat the bar of candy. They just bought them to get the Golden Tickets. Willy Wonka wants to make people happy with the candy bars he produces; only with Charlie he succeeds.

For these reasons, Charlie inherits the Chocolate Factory.

はじめに

ウィリー・ウォンカ (Willy Wonka) は10年の沈黙を破り、神秘に満ちた彼のチョコレート工場を公開すると新聞で発表する。ウォンカのチョコに入ったゴールデン・チケットを発見した5人の子どもを工場に招待するというのである。これはウォンカ氏が工場の跡継ぎを見つけるために仕掛けた策略だった。選ばれた5人の子どもたちの中から最終的にチャーリー・バケット (Charlie Bucket) が選ばれるのだが、なぜ毎日の食事にも事欠く家庭のチャーリーが選ばれたのだろうか。「貧困」をキーワードにその理由を読み解く。

1. ゴールデン・チケット獲得方法

ゴールデン・チケットを獲得した5人の子どもたちは全員、ひとりっ子だと言ってよいだろう。チ

チャーリーはひとりっ子と描写されているが他の子どもたちはひとりっ子とは明言されていない。だが、きょうだいに関する言及はなく、両親の溺愛ぶりが強調されている点からも全員がひとりっ子であると考えられる。

5枚目のチケットを手にしたのは、チャーリーだった。まず、他の4人の子どもたちはどのようにチケットを獲得したかを考察する。

最初の獲得者、オーガスタス・グループ (Augustus Gloop) は食べたいものを食べただけ食べる超肥満児である。母親は息子がゴールデン・チケットを当てたのは当然だと、次のように新聞に述べている。

“I just *knew* Augustus would find a Golden Ticket, …… He eats so *many* candy bars a day that it was almost *impossible* for him *not* to find one. Eating is his hobby, you know. That’s *all* he’s interested in. But still, that’s better than being a *hooligan* and shooting off *zip guns* and things like that in his spare time, isn’t it?”¹

毎日たくさんのチョコを食べるオーガスタスが当たらないはずがない、と言うのである。カネにあかせて子どもにチョコレートを買い与え、その結果、彼はチケットを手に入れた。欲しいものを欲しいだけ与えられるオーガスタスは、我慢したことも、我慢する必要もない状況にあり、両親が彼を自愛心の欠如した子どもに仕立て上げたことがわかる。

二番目の当選者はヴェルーカ・ソルト (Veruca Salt) というピーナッツ工場社長の娘だった。娘が欲しがるゴールデン・チケットを手に入れるために使ったカネは、オーガスタスの場合とは比較にならない額である。彼女の父親はチケットをいかにして手に入れたかを得意気に次のように語る。

“You see, fellers, …… as soon as my little girl told me that she simply *had* to have one of those Golden Tickets, I went out into the town and started buying up all the Wonka candy bars I could lay my hands on. *Thousands* of them, I must have bought. *Hundreds* of thousands! Then I had them loaded onto trucks and sent directly to my *own* factory. I’m in the peanut business, you see, and I’ve got about a hundred women working for me over at my joint, shelling peanuts for roasting and salting. That’s what they do all day long, those women, they sit there shelling peanuts. So I says to them, ‘Okay, girls,’ I says, ‘from now on, you can stop shelling peanuts and start shelling the wrappers off these crazy candy bars instead!’ (p. 24, underlining mine.)

「ゴールデン・チケットを1枚、どうしても手に入れなくちゃいけない」、このヴェルーカの望みを叶えるため、ピーナッツ工場社長の父はカネに物を言わせてチョコレートを大量に購入し、従業員を総動員してチケット獲得を目指す。目的のためには手段を選ばない人物である。また、“I says”を繰り返す口にするソルト氏は、しっかりした教育を受けた代々続く金持ちではなく、一代で事業に成功した成金のようにも思われる。なりふり構わず娘の願いを叶えようとする父親の姿は、社長として金儲けに専念する姿と二重写しに描写される。ヴェルーカは「欲しい」と言いさえすれば、父がカネの力ですべてを叶えてくれると考える我儘娘になってしまったのである。

3枚目のチケットを獲得したのは、ヴァイオレット・ボールガード (Violet Beauregarde) という常にガムを噛み続ける女の子だった。チケットのことを知り、ガムに替えてチョコレートを買い続けた。

早口かつ大声で話し、噛んだガムをエレベーターのボタンにつけるいたずらが好きだったと公言して憚らない。

Because I liked sticking the gooey piece that I'd just finished with onto one of the elevator buttons. Then the next person who came along and pressed the button got my old gum on the end of his or her finger. Ha-ha! And what a racket they kicked up, some of them. You get the best results with women who have expensive gloves on. (p. 32)

いたずらが好きなのは子どもの習性とも言えようが、それを新聞記者に得意気に話すところに自己顕示欲が見え隠れする。それはガムを噛み続ける記録保持者であることを吹聴することからも明らかである。ゴールデン・チケットを引き当てた彼女以外の4人の子どもは、インタビューで「ハハ！」と得意気に笑ったりはしない。“Beastly girl”, “Despicable!” (p. 32) とはチャーリーの祖母たちの感想である。

4枚目のチケットは、マイク・ティービー (Mike Teavee) という男の子が手に入れた。彼は名前の通り、テレビを見るのが何よりも好きで、新聞記者のインタビューで質問されても、“Can't you fools see I'm watching television? …… I wish you wouldn't interrupt!”, “Quiet! …… Didn't I tell you not to interrupt!” (p. 33) と言い放つ。自分のしたいことをだれにも邪魔されたくなく、好きなことを好きに行っているマイクであれば、チョコレートも好きなだけ買ってもらえたと考えるのは当然の流れである。

以上、4人の子どもたちは、多くのチョコレートを購入してゴールデン・チケットを手に入れたことがわかる。

では、チャーリーの場合はどうだろうか。チャーリーは、両親、両親の父母6人と暮らすひとりっ子である。しかし、好き勝手に過ごす他の4人の当選者のように我儘っ子であるのとは全く異なっている。父が歯みがき工場から朝から晩まで働いているにもかかわらず、その生活は食べるにも事欠くほど貧しかった。

The Buckets, of course, didn't starve, but every one of them — the two old grandfathers, the two old grandmothers, Charlie's father, Charlie's mother, and especially little Charlie himself — went about from morning till night with a horrible empty feeling in their tummies. (p. 5)

6人の大人たちにかわいがられ育つチャーリーだが、常に空腹に苦しめられていた。彼が大好きなものはチョコレートだった。だが、近隣に建つウォンカ氏の巨大なチョコレート工場から毎日流れるチョコレートの甘い香りをかきながらもそれを味わうことはできず、いつかは工場の中に入りたいと思うのだった。

チョコレートが大好きなチャーリーのために、家族は1年間節約をして誕生日プレゼントにウォンカのチョコを贈るのが習わしだった。

Only once a year, on his birthday, did Charlie Bucket ever get to taste a bit of chocolate. The whole family saved up their money for that special occasion, and when the great day arrived, Charlie was always presented with one small chocolate bar to eat all by himself. And each time he received it,

on those marvelous birthday mornings, he would place it carefully in a small wooden box that he owned, and treasure it as though it were a bar of solid gold; and for the next few days, he would allow himself only to look at it, but never to touch it. Then at last, when he could stand it no longer, he would peel back a *tiny* bit of the paper wrapping at one corner to expose a *tiny* bit of chocolate, and then he would take a *tiny* nibble — just enough to allow the lovely sweet taste to spread out slowly over his tongue. (p. 6)

4人の子どもたちが好き勝手にし、好きなだけチョコレートを買ってもらえるのとは対照的である。それでも、チャーリーは家族に、おなか一杯ご飯を食べたい、もっとチョコレートを食べたいなどと文句を言ったことは1度もない。1個のチョコレートが自分の誕生日のために家族ができる精いっばいのプレゼントであることをよく理解しており、それを一日でも長く味わおうとする。4人の子どもたちにはない忍耐、物を大切にすることが備わっている。

年に1個だけもらえる誕生日プレゼントのチョコレートの包装紙を開ける日、チャーリーも家族もゴールデン・チケットが入っているのではないかと期待する。“You have as much chance as anybody else.” (p. 21) と言われ、もしかしたら、とチャーリーも家族も期待するのだった。だが、そのチャンスは宝くじに当たるような夢物語であることを家族は全員わかっていた。そのプレゼントのチョコレート (WONKA'S WHIPPLE-SCRUMPTIOUS FUDGEMALLOW DELIGHT) の包み紙の下には、やはりゴールデン・チケットはなかった。6人の家族がチャーリーのショックを軽減しようとしているのを敏感に感じ取る。

Charlie looked up. Four kind old faces were watching him intently from the bed. He smiled at them, a small sad smile, and then he shrugged his shoulders and picked up the candy bar and held it out to his mother, and said, “Here Mother, have a bit. We’ll share it. I want everybody to taste it.”

(p. 29)

ここで注目すべきは、チャーリーの行動である。例年、1か月は持たせて少しずつ味わいながら大切に食べるチョコレートを家族みんなで食べよう、と言うのである。チャーリー同様、一縷の望みを抱いていた大人たちの気持ちを思いやり、おいしいチョコレートを一緒に食べることで感謝の気持ちを伝えようとしたのである。

その後、ジョーじいちゃん (Grandpa Joe) はへそくりを渡してチャーリーにチョコレート (WONKA'S NUTTY CRUNCH SURPRISE) を買いに行かせるが、これもむなしく失敗に終わる。人生、そんなに甘くない、と読者はチャーリーと共に感じることになる。まもなく、チャーリーの父親は失業、生活はますます苦しくなり、一家はやせ細り、育ち盛りのチャーリーは空腹に耐えられないはずであるが、それでも自分の食事にしか手を付けようとしない。食欲という極めて原始的な生理的欲求に屈さぬ強い精神力と他者への思いやりが強調される場面である。

さて、「現実・日常世界で、そこにファンタジー世界の住人がやってきて、超自然的なことを引き起こすものを、エヴリデイ・マジック (everyday magic)」² と言うが、チャーリー一家が絶体絶命の危機に陥ったまさにそのとき、エヴリデイ・マジックが始まるのである。“He’s a magician!” (p. 20) とジョーじいちゃんに言われるウォンカ氏である。チャーリーの身にマジックが起こっても不思議はない。

ある日、チャーリーは半分雪に埋もれた1ドル札を見つける。あたりを見回すが、だれも落ちてい

る1ドル札を気にしている人はいない。つまり、1ドル札の所有者はだれもいない。突如チャーリーの目の前に出現した1ドル札は、『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland, 1865)に描写されるアリスの目の前に出現する鍵や、“Drink me”と書かれた小瓶，“Eat me”と書かれたケーキのようだ。

Carefully, Charlie pulled it out from under the snow. It was damp and dirty, but otherwise perfect.

A WHOLE dollar!

He held it tightly between his shivering fingers, gazing down at it. It meant one thing to him at that moment, only *one* thing. It meant FOOD. (p. 42)

お金＝食べ物と考えてしまうほどチャーリーは飢えていた。1ドル札を手には、彼はまるで魔法にかけられたかのように誕生日にプレゼントされたウォンカのチョコを1個、買い求める。

Charlie grabbed it [the candy bar] and quickly tore off the wrapper and took an enormous bite. Then he took another… and another… and oh, the joy of being able to cram large pieces of something sweet and solid into one's mouth! The sheer blissful joy of being able to fill one's mouth with rich solid food! (p. 43)

このとき、チャーリーはゴールデン・チケットのことなど完全に忘れていた。それほど切羽詰まっていたのである。奇跡的に手に入れたチョコレートを食べる喜びを感じながら、大変な勢いで食べ続ける。

Charlie went on wolfing the candy. He couldn't stop. And in less than half a minute, the whole thing had disappeared down his throat. He was quite out of breath, but he felt marvelously, extraordinarily happy. He reached out a hand to take the change. (pp. 43-44)

おいしいものを食べると人は心から満足し、幸せになる。『バベットの晩餐会』で心を閉ざしたままバベットの作る食事を食べた村人たちが、そのえも言われぬおいしさになんとも幸せになるのと同様である。チョコレートを食べた幸福感とその誘惑に耐えられず、チャーリーはもう1個だけ同じチョコレートを買ってしまう。そして、奇跡が起きた。彼はチョコの中にゴールデン・チケットを発見するのである。

チャーリーだけが、偶然の幸運に助けられ、ゴールデン・チケットを手に入れる。しかもそれは工場に招待される前日のことだった。

2. ウォンカ氏の跡継ぎ選び

ゴールデン・チケットを獲得した子どもたちは、新聞にインタビュー記事が載り、世界中から注目を浴びる。新聞を通じて、ウォンカ氏は子どもたちに会う前から、彼らの情報をある程度把握することができたというわけだ。こうして収集した情報をもとに、彼は自分の跡継ぎを見定めることになる。子どもたちとその保護者は工場に案内されるが、“The place was like a gigantic rabbit warren.” (p. 62), “We are now going underground!” (p. 62)とあるように、一行は地下に向かっていく。『不思議の国のアリス』のアリスが白ウサギの後を追って地下の不思議の国に飛び込んだように、一行も地

下の不思議の世界へと突入していくのである。

オーガスタス・グループは食い意地が張っており、おいしいものを食べ続けずにはいられない。ウォンカ氏の本格的な工場にある水の代わりにチョコレートが流れる川のチョコレートを飲むのに夢中で川に落ち、流され、このままではファッジにされてしまう。両親は驚き、息子の救出をウォンカ氏に訴える。

“He [Augustus]’ll be chocolate fudge!” shrieked Mrs. Gloop.

“Never!” cried Mr. Wonka.

“Of course he will!” shrieked Mrs. Gloop.

“I wouldn’t allow it!” cried Mr. Wonka.

“And why not?” shrieked Mrs. Gloop.

“Because the taste would be terrible,” said Mr. Wonka. “Just imagine it! Augustus-flavored chocolate-coated Gloop! No one would buy it.” (p. 76)

オーガスタスの両親もウォンカ氏もオーガスタスがファッジに加工されてしまうのではないかと心配しているが、その理由が全く異なっている。両親はもちろんかわいい息子の命を救いたいのであり、ウォンカ氏は大切なお菓子を守りたいのである。ウォンカ氏の最大の関心事は、自らが作り出すお菓子であり、お菓子が我が子のような存在なのである。両親は、工場で働くウンパ・ルンパ (Oompa-Loompa) に連れられ、息子の元へと急ぎ、工場見学から脱落する。

その後、ウォンカ氏は一行をピンクのボートに乗せ、暗いトンネルに突入する。明かりがつくと、室名のついたドアが次々に現れる。ここでも、アリスが暗い穴を通り抜けたのちに目の当たりにし興味を誘われるドアのイメージが連想される。アリスは不思議の国で繰り広げられる言葉遊びに翻弄されるが、ウォンカ氏も言葉遊びを連発する。³

こうしたやり取りを楽しみながらウォンカ氏が次に一行を連れて行ったのは、“a chewing-gum meal” (p. 94) と呼ばれる、噛めば食事が摂れるガムを開発する部屋である。ガムを噛み続ける新記録を更新中のヴァイオレットが、このような不思議なガムを見れば、噛まずにいられなくなるのは当然だ。ゴールデン・チケット当選のインタビュー記事からも、ガムを噛みながら大声で早口にまくしたてる奇矯な態度が明らかだが、開発中のこのガムを見たときの彼女の口調もかなり乱暴である。

…… “just so long as it’s a piece of gum and I can chew it, then *that’s* for me!” And quickly she took her own world-record piece of chewing gum out of her mouth and stuck it behind her left ear. “Come on, Mr. Wonka,” she said, “hand over this magic gum of yours and we’ll see if the thing works.” ……

“I want the gum!” Violet said obstinately. (p. 95)

招待主のウォンカ氏に “Come on” と呼びかけ、ガムをせがむヴァイオレットの無駄な振る舞いが強調されている。それとは対照的に、ウォンカ氏には “I would rather you didn’t take it” (p. 95) と丁寧に答えさせている。まだ調整できていないところがあると言うウォンカ氏の言葉を無視して、彼女はガムを口に入れてしまう。

…… before Mr. Wonka could stop her, she shot out a fat hand and grabbed the stick of gum out of the

little drawer and popped it into her mouth. At once, her huge well-trained jaws started chewing away on it like a pair of tongs

“Don’t!” said Mr. Wonka.

“Fabulous!” shouted Violet. (p. 95)

ダメと言われれば言われるほどやりたくなるのは人の常である。まして、ガムが大好きで四六時中噛んでいるヴァイオレットにダメと言っても効果があるはずがない。その気持ちをあおるようにウォンカ氏はやめろと言いつける。

“Stop!” said Mr. Wonka. “The gum isn’t ready yet! It’s not right!”

“Of course it’s right!” said Violet. “It’s working beautifully! Oh my, what lovely soup this is!”

“Spit it out!” said Mr. Wonka.

.....

“No, no, no, no, no! It isn’t ready for eating! It isn’t right! You mustn’t do it!” (p. 96)

いくら熱心に止めようとしても、誰も彼女にガムを噛むのをやめさせることはできない。ついに彼女の全身はブルーベリー色に変色し、巨大なブルーベリーのように体全体が膨らんでしまうのだった。この変化を見た両親は心配のあまり叫び続ける。一方、ウォンカ氏はオーガスタスの場合と同様、開発中のガムのことしか関心がない。

“It *always* happens like that,” sighed Mr. Wonka. “I’ve tried it twenty times in the Testing Room on twenty Oompa-Loompas, and every one of them finished up as a blueberry. It’s most annoying. I just can’t understand it.” (pp. 98-99)

ウォンカ氏がわざわざ開発中のガムをヴァイオレットに見せたのは、周りがいくら制止しても必ず彼女はガムを食べると考えていたからではないか。当選した5人の子どもたちの性格や習慣を事前に知るために新聞のインタビューを利用し、自らの新商品開発実験の一端を子どもたちに自発的に担わせるように仕向けているとすれば、ここに作者ダール (Roald Dahl, 1916-1990) が大人向けに書いたミステリー小説に通ずる、いわゆる不気味なテーマを感じさせる。

巨大なブルーベリーのように膨れ上がったヴァイオレットは、ウンパ・ルンパにジュース室へ運ばれ、体内のジュースを絞られることになる。我が子を心配する両親はジュース室に続き、また1組、一行から脱落するのであった。

次に一行が向かったのは、クルミの良し悪しの選別をする100匹のリスがいる部屋だった。ヴェルカーは、ここに来るまでに見たウンパ・ルンパ、ピンクのボートなどを片っ端から欲しがったが、もちろん今度はリスを欲しがった。

“I [Veruca] want one. …… I want a *squirrel!*”

“All right, my pet,” Mrs. Salt said soothingly. “Mummy’ll get you a squirrel just as soon as she possibly can.”

“But I don’t want *any* old squirrel!” Veruca shouted. “I want a *trained* squirrel!”

At this point, Mr. Salt, Veruca’s father, stepped forward. “Very well, Wonka,” he said

importantly, taking out a wallet full of money,” how much d’you want for one of these crazy squirrels? Name your price.”

“They’re not for sale,” Mr. Wonka answered. “She can’t have one.”

“Who says I can’t!” shouted Veruca. “I’m going in to grab me a squirrel this very minute!”

“Don’t!” said Mr. Wonka quickly, but he was too late. The girl had already thrown open the door and rushed in. (p. 111)

ピーナッツ工場社長の父はカネの力で得られぬものはないと考える成金であり、欲しいものは何でも買い与えられていた娘もまた、欲しいものは何でも手に入られると考えている。彼女のゴールドン・チケットの獲得方法がまさにそれを証明している。ヴァイオレットの場合と同様、ウォンカ氏はソルト一家のこうした性癖をインタビュー記事で事前に知り、それを利用しての行為と考えられる。自らリスたちの中に飛び込んでいったヴェルルーカは、さながら小人の国のガリバーのように100匹のリスに羽交い絞めにされ、クルミの選別同様、彼女の頭をたたかれるのである。その様子を見ていたウォンカ氏は“My goodness, she is a bad nut after all,”と言い、“Her head must have sounded quite hollow.” (p. 112) とこともなげに言い放つ。結局、ヴェルルーカは悪しき頭と判断され、ダストシュートに落とされてしまう。

ウォンカ氏は、もちろん、ヴェルルーカがこのような行動をとることを事前に予測していたはずだ。ダストシュートに落とされて当然といった態度である。助けてと叫ぶ母親に、彼は“Too late, …… She’s gone!” (p. 113) と冷静である。娘を助けに行った両親も同様に、リスにダストシュートに落とされることになる。以下は、その様子を見ていたチャーリーとウォンカ氏の会話である。

“Oh dear!” cried Charlie, who was watching with the others through the door, “what on earth’s going to happen to them now?”

“I expect someone will catch them at the bottom of the chute,” said Mr. Wonka.

“But what about the great fiery incinerator?” asked Charlie.

“They only light it every other day,” said Mr. Wonka. “Perhaps this is one of the days when they let it go out. You never know…they might be lucky…” (p. 116)

焼却炉に落ちて焼け死んでは一大事である。そこでウォンカ氏はあえて火をつけない日にゴールドン・チケット当選者たちを工場に招待したのであろう。ソルト一家が消えてもウォンカ氏は全く意に介さない。むしろ、当然の成り行きと受け止めている感さえある。

子どもたちが脱落していくたびに、必ず聞こえるウンパ・ルンパの歌は、ギリシャ悲劇のコーラスを思わせる。脱落した子どもたちの運命を歌い、その原因を歌う。ウンパ・ルンパの歌に耳を傾けるのは、チャーリーとジョーじいちゃんだけである。

マイクとチャーリーの2人だけが残されたとき、ウォンカ氏は“The children are disappearing like rabbits!”と言うが、ここでもウサギ穴に落ちて消えるアリスのイメージが重なる。彼は続けて“But you mustn’t worry about it! They’ll all come out in the wash!” (p. 118) とこともなげに言うのだった。最後にはすべてうまくいくように意図的に仕組まれていることが暗示される。

残った2人の子どもたち、マイクとチャーリーは巨大エレベーターに連れていかれる。マイクはゴ

ールデン・チケット当選後のインタビュー時に、テレビを見る邪魔をされて “Didn’t I *tell* you not to interrupt!” などと言い返した少年である。この対応をウォンカ氏はよく覚えており、マイクの発する質問に対して、“There’s no time to answer silly questions!” (p. 86), “Don’t argue, my dear child, *please* don’t argue!” (p. 91), “I do wish you wouldn’t mumble, …… I can’t hear a word you’re saying.” (p. 103), “Don’t interrupt!”, “You’re mumbling again.” (p. 105), “……, stop interrupting me!” (p. 125) とマイク自身が発したのと同様の返事をするので、彼の質問や興味を遮断する。それに対して、ウォンカ氏がチャーリーには優しく対応しているのは、注目に値する。

さて、テレビ好きのマイク・ティービーは、エレベーターに乗って “Television Chocolate” (p. 125) の部屋を選ばされ、そのボタンを喜んで押す。到着したその部屋でいつもはほとんど洋服を着用しないウンパ・ルンパが赤い宇宙服を着ているのを観察して、チャーリーは素早く危険を察知する。だが、マイクはそんな危険を全く感じることはなく、物を送ることができるテレビを目にして興奮する。難点はテレビで送られたものは原型よりも小さくなってしまうことだ。

全く危険を察知しないマイクは、テレビでチョコレートを送れたことに感激してか、ウォンカ氏にチョコレート以外のものも送れるのか質問し始める。これまでは前述のように彼の質問には答えないウォンカ氏なのだが、なにか魂胆があるのだろうか、ここではマイクが喜ぶような返答をする。

“But Mr. Wonka,” he [Mike] shouted, “can you send *other things* through the air in the same way? Breakfast cereal, for instance?”

.....

“And what about people?” asked Mike Teavee. “Could you send a real live person from one place to another in the same way?”

“A *person!*” cried Mr. Wonka. “Are you off your rocker?”

“But *could* it be done?”

“Good heavens, child, I really don’t know...I suppose it *could*...yes, I’m pretty sure it could...of course it could...I wouldn’t like to risk it, though...it might have some very nasty results....” (p. 130)

“I’m pretty sure it could...of course it could...” (p. 130) とウォンカ氏が言うのを聞くが早いか、マイクは「最初にテレビで送られる人になるんだ」と叫びながら駆け出した。例のごとく、ウォンカ氏は “No, no, no, no!” (p. 130) と叫ぶが、だれもマイクを止められない。ウォンカ氏は、またしても、表面的には不本意ながらも人体実験を実施する結果を招くことになる。ここでも彼の冷静な態度はマイクの両親の動揺ぶりと対照的である。

Then Mrs. Teavee ran forward...but she stopped dead in the middle of the room...and she stood there...she stood staring at the place where her son had been...and her great red mouth opened wide and she screamed, “He’s gone! He’s gone!”

“Great heavens, he *has* gone!” shouted Mr. Teavee.

Mr. Wonka hurried forward and placed a hand gently on Mrs. Teavee’s shoulder. “We shall have to hope for the best, …… We must pray that your little boy will come out unharmed at the other end.” (p. 131)

ウォンカ氏の最大の関心事は、人間がどの部分も欠けることなく自分の開発した機械で送れるか否かであり、彼は科学者が実験の行方を見守るような冷静な興奮状態で事態を見守っている。だが、ティービー夫妻はじっとしてはられない。自分のかわいい息子がもしかしたら体の一部を失ってしまうかもしれない、と思っただけで気も狂わんばかりである。

結局、マイクは手のひらに乗るほどに小さくなったが、完全な形で両親の前に姿を現した。それでも彼は自分の身に起きた変化に気付かないらしく、小さくなくても“I want to watch television!” (p. 134) と4回も繰り返し主張する。状況を把握できないのである。後にウンパ・ルンパが歌うコーラスに示されているように、テレビばかり見ているマイクには、全く想像力が欠如しているのだ。自分の置かれた状況も理解できず、現実を受け止めることができないため、成長することもない。読書の必要性を潜ませた小説家ダールのメッセージと受け取れよう。

こうして、招待された5人の子どもから4人が脱落し、チャーリーだけが残ったのである。

3. ウォンカ氏とチャーリー

“He’s a magician!” と評されるウォンカ氏は、すでに考察したように、新聞のインタビューを利用して情報収集するなど、現実的な要素も取り入れつつ、エヴリデイ・マジックを使って自分の後継者探しを行ってきた。驚くふりをしているところから、最終的にチャーリーが残るのをウォンカ氏は最初から知っていたようである。

Mr. Wonka swung round and stared at Charlie.

There was a silence. Charlie stood there holding tightly onto Grandpa Joe’s hand.

“You mean you’re the *only* one left?” Mr. Wonka said, pretending to be surprised.

“Why yes,” whispered Charlie. “Yes.”

Mr. Wonka suddenly exploded with excitement. “But my *dear boy*,” he cried out, “*that means you’ve won!*” …… “Oh, I do congratulate you!” (p. 142, underlining mine.)

好きなものを好きなだけ買える家庭の子どもではなく、食べることに事欠く貧しい家庭に育ったチャーリーが、なぜ跡継ぎレースに勝ち残ったのだろうか。5人は全員、ひとりっ子と考えられる。ひとりっ子は、上にも下にもきょうだいがなく、思い通りに何でもできるため、オーガスタス、ヴァイオレット、ヴェルーカ、マイクのように我儘で、他人の気持ちを思いやることができないことが多い。そのため、子どもを「能力のある、しっかりした人間にするには、適当に不自由、不幸、苦勞することが不可欠」だとする説がある。⁴ 5人の子どもの中で「不自由、不幸、苦勞」に直面しながら、明るく素直に育っているのはチャーリーだけである。子どもはただ甘やかしてかわいいがだけでは、4人のようにどうしようもない子どもになってしまうのだ。

人間は、「不幸という敵」があるからこそ、「それに負けまいという意志と努力が生まれる。それがしばしば成功につながる」のである。「もっと普通の敵は“貧困”」であり、日本にも「最大の教育力をもつのは貧困」であった時代があった。⁵ 貧困を通して経験する社会勉強のおかげで、チャーリーは忍耐力、思いやり、観察力、そして人を信頼する力を身に着けることになる。

チャーリーはウォンカ氏の最終候補に残ったが、ここから本当のテストが始まる。秘密のレシピが詰め込まれた大切な工場をウォンカ氏が譲るにふさわしい子どもに必要な条件とは何か。以下、チャ

ーリーとジョーじいちゃんを中心に考察する。

工場見学中に、ウォンカ氏は骸骨のように痩せこけたチャーリーとジョーじいちゃんに、チョコレートの川からチョコレートドリンクを汲み与える。

Charlie put the mug to his lips, and as the rich warm creamy chocolate ran down his throat into his empty tummy, his whole body from head to toe began to tingle with pleasure, and a feeling of intense happiness spread over him.

“You like it?” asked Mr. Wonka.

“Oh, it’s wonderful!” Charlie said.

“The creamiest loveliest chocolate I’ve ever tasted!” said Grandpa Joe, smacking his lips.

(p. 84, underlining mine.)

おいしいものが人を幸せにすることをチャーリーもジョーじいちゃんも、体験を通して知っているのだ。

おいしいもの、すなわちここではウォンカ社製のチョコレートが人を幸せにすることをチャーリーは最初から知っていた。1ドル札を拾って購入したウォンカ社製のチョコレートを食べたチャーリーが、“marvelously, extraordinarily happy”と感じているのは前述の通りである。カネの力にあかせて味も幸せもかみしめることなく、ただ食べ物を食べる子どもとは大違いである。チャーリーは、貧しい家庭で育ったために、ウォンカ社製のチョコレートを少しずつ味わって賞味し、それが世界一おいしく、食べた人を幸せにする、つまり、ウォンカ社製のチョコレートを買うことは、幸せを買うことと等しいことを知っている。そして、チャーリーがウォンカ氏の跡継ぎになり、彼のレシピ通りのチョコレートを作り続ければ、それを買った人々に幸せを提供し続けることになるのである。

次に注目したいのは、4人の子どもたちがチョコレート工場でウォンカ氏と両親の制止を無視して飛び回っているのとは対照的に、チャーリーはいつもジョーじいちゃんの手を握っている点である。工場の門の外で開門を待っているときも、ウンパ・ルンパが漕ぐピンクのボートが登場したときも、ヴァイオレットが巨大ブルーベリーのように膨らんだときも、マイクがテレビで送られ小さくなったときも、最後にチャーリーが残ったときも、2人はしっかりと手を握っていた。貧困という極限状態では、人の本性が現れる。バケット家はキャベツとパンさえもわずかしか食べられず、常に空腹に苦しんでいるにもかかわらず、一家7人が寄り添い、チャーリーを囲んで楽しい団らんの時間を持っている。貧困を恨んだり、だれかを逆恨みすることもない。互いに信じあい、いたわりあって、可能な限り家族に心配をかけまいと努力する。手を握る行為は、互いの信頼感の表れであるのだ。

And every day, Charlie Bucket grew thinner and thinner. His face became frighteningly white and pinched. The skin was drawn so tightly over the cheeks that you could see the shapes of the bones underneath. It seemed doubtful whether he could go on much longer like this without becoming dangerously ill.

And now, very calmly, with that curious wisdom that seems to come so often to small children in times of hardship, he began to make little changes here and there in some of the things that he did, so as to save his strength. In the mornings, he left the house ten minutes earlier so that he could walk slowly to school, without ever having to run.

(p. 40)

チャーリーは貧困を敵として自主的に生活を改善していくことはないが、子どもなりに、空腹に耐え、食べたいという欲望を抑制し、生き抜くために無駄なエネルギーを使わないよう工夫する。彼はこの努力を他者、つまり家族のために行っているのである。他人のために何かをしようとする気持ちは、ウォンカ氏の人を幸せにするためにチョコレートを作ろうとする思いとつながる。そこで彼はチャーリーに次のように語りかける。

“How I love my chocolate factory,” said Mr. Wonka, gazing down. Then he paused, and he turned around and looked at Charlie with a most serious expression on his face. “Do *you* love it, too, Charlie?” he asked.

“Oh, yes,” cried Charlie, “I think it’s the most wonderful place in the whole world!” (p. 150)

チャーリーが自分と同じ価値観を持っているか、ウォンカ氏は彼に確かめている。チャーリーの答えは、工場を心から愛するウォンカ氏を満足させるものだった。

価値観を共有する子どもを見つけたウォンカ氏は、喜びを表現する。

“I am very pleased to hear you say that.” said Mr. Wonka, looking more serious than ever. He went on staring at Charlie. “Yes,” he said, “I am very pleased indeed to hear you say that. And now I shall tell you why.” Mr. Wonka cocked his head to one side and all at once the tiny twinkling wrinkles of a smile appeared around the corners of his eyes, and he said, “You see, my dear boy, I have decided to make you a present of the whole place. As soon as you are old enough to run it, the entire factory will become yours.” (pp. 150-151)

ウォンカ氏は軽やかに行動するが、実はかなりの年齢を重ねていることがわかる描写である。貧困に性格を捻じ曲げられることなく、互いをいたわりあう愛情あふれる家族の中で育ったチャーリーは、ひとりっ子であるにもかかわらず、他者を思いやり、幸せを理解する人物として、ウォンカ氏の跡継ぎにふさわしいと認められたのである。

おわりに

ウォンカ氏が工場の跡継ぎを考えるようになったのは、自分には家族がいないこと、工場内で生活し、働くウンパ・ルンパの生活場所を持続する必要性が理由として挙げられる。その他の理由で、最も重要なものは、工場で生産する菓子の存続である。

Mind you, there are thousands of clever men who would give anything for the chance to come in and take over from me, but I don’t *want* that sort of person. I don’t want a grown-up person at all. A grownup won’t listen to me; he won’t learn. He will try to do things his own way and not mine. So I have to have a child. I want a good sensible loving child, one to whom I can tell all my most precious candy-making secrets—while I am still alive. (p. 151)

菓子作りに関するウォンカ氏の自負が感じられる個所である。自信を持って菓子を世の中に提供し、それを食べた人を幸せにする、それがウォンカ氏の望みなのだ。ジョーじいちゃんは、工場ツアーに参加している他の大人たちが疑いの目を向けるときもただ一人、ウォンカ氏を信じる姿勢を変えな

った。⁶ そのジョーじいちゃんと手を固く握りあうチャーリーもまた、ウォンカ氏を全面的に信頼している。ウォンカ氏は全面的に信頼できるチャーリーという少年を探し当て、工場の跡継ぎを見出したのである。小説のタイトル *Charlie and the Chocolate Factory* は、30章目のタイトルが示すように、ついに“Charlie’s Chocolate Factory”となるのである。

注

- 1 Roald Dahl, *Charlie and the Chocolate Factory*, New York: Puffin Books, 2007, p. 22.
以下、引用はこの版による。
- 2 齊藤美加, 『英米児童文学を読む: アリスから湾岸戦争まで』, 東京: DTP 出版, 2011 年, p. 80.
- 3 “ALL THE CREAMS — DAIRY CREAM, WHIPPED CREAM, VIOLET CREAM, COFFEE CREAM, PINEAPPLE CREAM, VANILLA CREAM, AND HAIR CREAM” や “STOREROOM NUMBER 71, …… WHIPS — ALL SHAPES AND SIZES”, “STOREROOM NUMBER 77 — ALL THE BEANS, CACAO BEANS, COFFEE BEANS, JELLY BEANS, AND HAS BEANS” 等が挙げられる。参照: *Charlie and the Chocolate Factory*, p. 86.
- 4 外山滋比古, 『逆説の生き方』, 東京: 講談社, 2016 年, p. 38.
- 5 *ibid.*, p. 39.
- 6 参照: *Charlie and the Chocolate Factory*, ウォンカ氏はいかれていると大人たちが言う中, ジョーじいちゃん一人が “No, he is not!” と反論する場面 (p. 85), 丸く見える四角いキャンディを認める場面 (p. 108), 物を送れるテレビを見て素直に感動する場面 (p. 128) 等。

参考文献

- Dahl, Roald. *Charlie and the Chocolate Factory*, New York: Puffin Books, 2007.
- Carroll, Lewis. Alice’s Adventures in Wonderland in *The Annotated Alice: The Definitive Edition*, London: Penguin Books, 2001.
- Swift, Jonathan, ed. Greenberg, Robert A., *Gulliver’s Travels*. New York: W.W. Norton & Company, 1961.
- 齊藤美加, 『英米児童文学を読む: アリスから湾岸戦争まで』, 東京: DTP 出版, 2011 年。
- 定松正編著, 『世界少年少女文学: ファンタジー編』, 東京: 自由国民社, 2010 年。
- ディーネセン, イサック著, 柘田啓介訳, 『バベットの晩餐会』, 東京: ちくま書房, 1992 年。
- 外山滋比古, 『逆説の生き方』, 東京: 講談社, 2016 年。

(かねこ やよい 英語コミュニケーション学科)